

# 「生まれてきたアナタへ」

作：サヘル・ローズ

語り：佐藤浩市

不思議ね、  
人は生まれてくるときは  
泣いているけれど、家族は笑っているの

人が亡くなるときは  
笑って穏やかな表情でいるけれど、家族は泣いているの。

ね、不思議でしょう？

私はね、  
「おはよう」と産声を上げて生まれたの。  
けれども、  
その日を私は知らない。

自分の故郷も  
家族も  
誕生日も  
私は、何も知らない。

私の本当の家族はどんな人？  
私はどこで生まれたの？  
ここは、どこ？

誰も答えてはくれない。

ポツンと隅っこでいつもしゃがんでいた、膝を抱えて。  
顔を髪の毛で隠した。

誰にも触れて欲しくない。  
誰の視界にも、はいりたくない。  
私を見ないで。  
孤独だった。  
冷たくて優しい闇が私の味方だった。

だからね、私は愛を知らないの。

いつのまにか  
社会から取り残されていく私。  
心の中では壊れていく機械音が時を刻む。  
それが私の心臓が奏でる鼓動。

神さま、 どうして私を産み落としたの？  
地球という冷たく、  
いがみ合いや憎しみに満ちたこの星に、  
どうして私を置き去りにしたの？

居場所なんてなく  
このまま消えてしまっても誰も気づかない。  
生まれてきたときのように  
今日も私は孤独の中へ帰ろうとした。

あの日、いつもと同じはずだった。  
名前を呼ばれるまでは。

久しぶりにきく自分の名前。  
こういう響きなんだ、と懐かしむ名前。

私を呼ぶのは誰？  
彼女が私を抱きしめる。

この香り、懐かしくて切なくて、近くて、遠い香り。

アナタは私のお母さんの香りを漂わせている。  
顔も知らない、私のお母さん。

アナタは記憶に焼きついた香りを漂わせている。  
見覚えのない、私のお母さん。  
憎くて仕方がない香りだけど、なぜか安らぐ香り。

アナタは私を抱きしめた。  
何度も何度も『ごめん』と呟きながら、  
アナタは私を離さなかった。

去ろうとするアナタを  
行かないでと必死に引き止めた。

私は家族が欲しかった。

私は愛情が欲しかった。  
私は視線が欲しかった。

私は生きたかっただけ。  
家族という味方を、  
親という同志を求めていただけ。

「ただいま」というと「おかえり」という  
「行ってきます」というと「行ってらっしゃい」という  
そんな居場所が私は欲しい。  
そんな普通の愛情で私を包み込んで欲しい。

私も人生を笑いたい。  
笑って、人生を終えたい。  
生まれてよかったな、と。

今度は手を離さないで、お母さん。  
血が繋がっていても、  
血が繋がっていなくても、  
これからはいつでもいつまでも手を握っていて、お母さん。

愛は心で出来ているの。  
心は愛で出来ているの。

アナタと繋がりたい。ずっと、ずっと、ずっとね。  
お母さん、ね、お母さん。